

福祉系 対人援助職養成の 現場から^{②1}

西川 友理

私事ですが…

この4月、社会福祉士を養成する学校から、保育士・幼稚園教諭を養成する学校に、転職しました。

もちろん色々考えた末の転職で、不安もありました。しかし、これまで私は保育士の資格を取得し、保育士を対象に研修をしたことがありますし、保育士と一緒に仕事をしたこともあります。何よりも、「保育士」は社会福祉分野の資格なのだから、これまでの経験を活用すれば、何とかなるやろ！と思って飛び込みました。

全然違うものは、違いがはっきり分かるから、意外と呑み込みやすい。しかし、少しだけ違うものは、違いがあまりわからないから、思ったより呑み込み難い…そんな感覚を今、噛みしめています。

いや、深いです、保育。毎日、衝撃を受ける事がたくさんあります。

新たに出会った考え方

「子どもは『大人になるために』生きているのではなく、『その時』を生きています。」^{注1)}

これは最近私が最も衝撃を受けた保育原理に関する言葉です。東京福祉大学の関口はつ江氏の著書の中で見つけました。

「今・ここ」で行われる支援が大切、という事は、社会福祉士の養成教育の中でも十分に認識していたつもりですし、よく言われる言葉であるのですが、改めて、なるほどなあと感じ入りました。

例えば「お花屋さんになりたい」とか「サッカー選手になりたい」といった夢はあるかもしれませんが、夢を持つことと成長を意識することは違います。

大人の意図はともかく、子ども自身は「成長するぞ」と、自らの成長を意識して毎日ご飯を食べたり、ジャングルジムに上ったりしているわけではありません。目の前のご飯を「おいしい」と感じなが

ら食べ、ジャングルジムにワクワクよじ登っていく日々の積み重ねをすごしています。

「いきいきしさ」

これも知らなかった言葉です。大正時代の前後に保育の場で活躍した児童心理学者、日本のフレーベルとも言われている倉橋惣三の著書『育ての心』にある言葉です。

「子どもの友となるに、一番必要なのはいきいきしさである。必要というよりも、いきいきしさをなくして子どもの傍らにあるは罪悪である。子どものもっとも求めてある生命を与えず、子どもの生命そのものを鈍らせずにおかないからである」

「あなたの目、あなたの声、あなたの動作（中略）あなたの感じ方、考え方、欲し方のすべてが、常にいきいきしているものでなければならない」

「いきいきしさの抜けた鈍い心、子どもの傍では、このくらい存在の余地を許されないものはない」^{注2)}

倉橋はこのようにいきいきしさについて説明しています。

この名詞自体は私の知っている限り、現在はあまり辞書にも載っていない様です。

私自身は、いきいきしさと言う言葉について、活気にあふれている、生きることを楽しんでいる、これらの様子を思い浮かべました。

この言葉は、様々な保育のテキストに引用されています。しかし社会福祉士の養成教育では、こういった事はそれほど

テキスト等には掲載されておらず、かなり衝撃を受けました。

もちろん上記したようないきいきしさをもつ人は、社会福祉士にもたくさんいますし、そのような人は現場においても、輝くような実践をなさっているように見受けられます。現場職員の日常会話や、「元気出していこう！」「まず自分が楽しくないとね！」等の励まし合いはあります。

しかし、活気にあふれているようでない人でも、自分なりの持ち味を生かした社会福祉士として、落ち着いて、しっかりと支援をされています。それに、時には活気にあふれている人と接するのが苦手なクライアントもいます。

自分自身を支援の道具として相手に関わる社会福祉士、その養成のためのテキストの中に、「いきいきしさを持たなければならない」というようなことが書かれていない理由は、このような事ではないかなと思います。

また、表現がとても難しいのですが、自分が社会福祉士として教育され、実践を重ね、養成に携わる中で、共感するとか、守秘義務を果たすとか、思いやりを持つ、といったような、「対象に配慮して行動に移す」ような言葉はよく目や耳にしましたが、いきいきするとか、活気にあふれる、といった、「内面の持ちようがそのままにじみ出るような表現を心掛ける」といったような言葉は、あまり触れたことがありません。

倉橋が、『育ての心』を刊行したのは、1936年（昭和11年）。当時は人々の貧富の差が激しく、子どもによっては劣悪

な環境下、食うや食わずの日々を過ごしていました。同著で倉橋は、冬の季節を「寒さと飢えの季節」と表現しています。冬の寒さがそのまま、飢えに直結するような時代において「いきいきしさ」「生命」という言葉は今とは比較にならない程の重い意味を持つ言葉であったと推察されます。

だからといって、「いきいきしさ」にまつわる上記の倉橋の文章は、現代にそぐわないわけではありません。活気のある先生は保育の現場にたくさんいらっしゃいますし、そんな先生の実践はとても素敵で、子どもの表情がいきいきと輝き、心からその場を楽しんでいるような様子を何度も見ました。

倉橋の「いきいきしさ」は受け継がれていると思われまます。

日々、このような新たな考え方に出会っています。

内面の持ちようがにじみ出るようになるためには、自らの感性を様々に刺激してセンスを磨くといったことをしなければなりません。私は、保育士というものは心の状態を常に繊細にし、センスを磨き、感受性を研ぎ澄ませている必要があるのだな、と感じました。

同じ社会福祉分野の資格でありながら、社会福祉士に比して、保育士にこれほどまで感受性が重視されているのはなぜなのか。恥ずかしながら私自身の勉強不足という理由はもちろんあるのですが、それはいったん横に置いておいて、一度、考えてみることにしました。

倫理綱領を比べてみる

社会福祉士にも、保育士にも、それぞれ日本福祉士会、全国保育士会という全国組織があり、それぞれの組織が作った倫理綱領があります。

ともに、専門職としての依拠すべき職業倫理が書いてあり、社会福祉士の行動規範はこの倫理に基づく行動規範も書かれています。

いわば倫理綱領は、それぞれの職業の指針が書かれています。

この2つの倫理綱領を見てみると、社会福祉士と保育士の特性が見えてきます。

まずは言うまでもなく、支援対象の特性があります。

社会福祉士の支援は「すべての人」を対象としています。

これに対し、保育士は「すべての子ども」を対象としています。

一般的に保育士の職場＝保育所と言うイメージがあるので、この「すべての子ども」は就学前の子どもを指すように感じるかもしれません。

制度上、保育士が必要とされる児童福祉施設には、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童養護施設、児童発達支援センター、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設などがあり、これらは原則的に18歳までの者を対象としています。ですから、社会福祉制度が示す子どもとは、18歳までの者を指します。

しかし、保育士が対峙する子どもと言えば、一般的なイメージとしてはやはり就学前児童でしょう。

それから、支援を具体的に働きかけるターゲットの特性が見えてきます

社会福祉士は、対象となる個人の、あらゆる人間関係や社会に働きかけます。時には国際社会も、そのターゲットとします。

保育士は、子どもの育ちと、保護者の子育て、子どもと子育てにやさしい社会をターゲットとしています。

また、支援の目的の特性もあります。

社会福祉士の目的は、自己決定の尊重、エンパワメント、社会変革、人間関係の改善等、環境に働きかけたり、支援対象が自ら生きていく環境を変えていこうとすることを側面的に支援したりといったことです。

保育士は、自らを「子どもが現在(いま)を幸せに生活し、未来(あす)を生きる力を育てる」仕事であるとしていますので、これが目的であると言えます。特に、倫理綱領全体を通じて「育ちを支える」という表現が多く、子どもが自ら育つことをその傍ら共にいて影響を与える、という姿勢が感じられます。

文章の冒頭に「社会福祉士と保育士は、少し違う」と書きましたが、こうして見てみると、それは具体的な仕事内容が全て違うのではなく、力点や視点の重きを置く場所が違うという事が視えてきました。

つまり、第一義的に何を支援とするのかの違いです。

社会福祉士は、全ての人を対象としているので、当然子どもも対象ですが、そ

の子どもに対して、「現在を幸せに、明日を生きる力を育てる」事の大切さも十分認識しつつ、第一義的に「社会関係や社会環境を整える」事に視点を置こうという傾向があるようです。

一方、保育士は、子どもの「社会関係や社会環境を整える」大切さも十分認識しつつ、第一義的に「現在を幸せに、明日を生きる力を育てる」事に視点を置こうという傾向があるようです。

保育士の専門性

子ども自身が意識していようがいないが、子どもは生物学的、心理学的、社会的に、問答無用で成長過程にあります。

心理学的には、子どもが社会や周囲の人々に対して基本的信頼感を持てるようになる必要があります。そのため、保育士はその子どもの環境を一定の安心と安全の中にある状態に保ち、子ども本人が、「日々の多少の変化や刺激はあっても、それによって日々の生活が根本から脅かされはしない、またすぐに安心と安全の中にある生活に戻れる」と、認識出来る必要があります。

一定の安心と安全を保つ事は、地味に見えますが日々の努力によって成り立つケアの積み重ねです。

またそのケアには専門的な知識と技術が必要なことはもちろん、子どもの成長を感受し、これに呼応したケアを行えるセンスが求められます。

つまり、冒頭に挙げた「その時」を見つめること、そして見つめるために傍らにいるときには「いきいきしさ」が必要

だということです。これを行う専門職が、保育士なのだと思います。

「懂れ」という漢字は心(りっしんべん)に、童(わらべ)と書きます。

子どもの心は、懂れの心。この世界には、懂れの対象となるようなたくさんのすてきな物、すてきな人間、素敵な事象があると気付くことも、基本的信頼感の醸成に役立つことです。保育士はこれもサポートします。

また保育士は、この世界における善である事、よいとされる事の方向性を示すモデルにもなり得ます。何が善か、何がよい事なのか、価値観が多様化した現在においては一概に規定する事は難しいかもしれません。一般的な法制度という基準はありますが、道徳やマナー、慣習などは地域や文化の特性があるので、保護者をはじめとした子どもに関わる大人同士で話し合い、コンセンサスを得る必要があります。

以上のような取り組みが「現在を幸せに、明日を生きる力を育てる」事であると言えます。

このような点に注目すると、社会福祉士は、その人がその世界において人生を明確にしていくことを支援する仕事であるのに対して、保育士は、子どもがその世界において人生の可能性を広げることを支援する仕事であると言えます。

保育士は、アーティスト！

パワーズは「ソーシャルワークはアートである」という言葉を残しています。

「ですから、社会福祉士はみんなアーティストなんですよ！」

などと、今まで私も、社会福祉士養成の授業で言っていましたが、子どもの懂れを育む「保育士」もまたさらに、アーティストでなければならぬように思います。

専門職としての技や知識を身につけている保育士が、「今・ここ」で、目の前に差し出されるものに気づき、感受する。

表情、行動、声、言葉など、自分の体を使って反応し、いきいきしさをもって表現する。

その表現には、その人の感受性と表現力の持ち味、センスが現れる。

子どもたちはそれを見聞きし、それとは知らぬ間に心と体に吸収し、成長の糧とする。

これはまるで、確かな演技力と、舞台に関する知識と、素晴らしいセンスをもって表現し、観客を魅了する、即興劇における役者のようだと思うのです。

即興劇の役者であるためには、技術や知識を習得する事と共に、「今・ここ」を受け止める感受性を磨く必要があります。

では、どのようにこれらの事を学生が自己研鑽できるように伝えていけばよいのか…色々と試行錯誤している最中です。

保育者養成の授業

先日、授業で、自然豊かな場所までみ

んなで散歩し、そこでネイチャーゲームをしました。

「音集めをしよう。口を閉じて、目を閉じて、3分間、耳をすませてみて。どれくらいの音が聞こえるかな。はい、スタート！」

様々な鳥のさえずり、風の音、虫の羽音、かすかに聞こえる車の音、少し遠くの話し声、足元の砂の音、自分の呼吸音。

「はい、目をあけて。」

この瞬間、学生たちの目の色が、語っています。

「…スゴイね。」

と。

日頃、特別に注意を払わずに生活しているけれども、静かに聴覚を研ぎ澄ませるだけで、思っていたより、ずっと豊かな音の世界に囲まれて生活していることが認識されます。

この経験を使って、次のワークや理論につなげて、授業を展開していきます。

…果たして、こういった授業方法がいいのかどうか、未だわかりません。わかりません。

ただ、「自分がケアしてもらって心地よかった方法は、自らが誰かにケアをする際にモデルになる」という事は、私が今まで携わってきた、他の対人援助職養成も保育士養成も一緒だと考えます。

またその他にも、私が今までの養成教育の中で感じた、「正論やデータ、一方的なお説教だけでは人の心は動かず、心が動かないと人は動かない」という事も、「誰かから教えられるよりも自ら気付けたことの方が身に就く」という事も、多分共通しているでしょう。

私は現在、「保育士として」「幼稚園教諭として」「社会福祉士として」という枠組みを超えて、私が今まで得た物で、「子どもと保護者に関わる人として」なにが必要か、というもっと本質的な部分まで立ち返って学生と共に考えることが出来るのではないかと思います。

ある先生にとっては苦手分野だけれど、保育士資格の制度として、絶対に教育しなければならない部分は、沢山の先達や先生方が関わっているのだから、分担すればいいだけのことです。

学生を専門職として養成するためには、多くの先達、先生方が連携し、協働していく事が不可欠だと感じます。

近接分野から来た、だからこそ

今までの対人援助マガジンで私が書いた文章を読み返してみると、私自身が、「社会福祉でない分野で社会人をしてきた人が、社会福祉士になってくれることで、社会福祉の現場は活性化する」と考えていたことがわかります。

私自身が生粋の「保育」でない分野から来た人間です。今後周囲の方々からの影響を受けて、そしてこちらからも影響を与えて、どのような専門職養成になっていくのでしょうか。なかなかエキサイティングだと思うのです。

.....

注1) 関口はつ江編著 『保育の基礎を培う保育原理』P10 萌文書林 2012年
注2) 倉橋惣三著 「育ての心」『倉橋惣三選集 第三巻』P33 フレーベル館 1965年